

上等の生活と 下等の生活

在米國 朝 露 生

衣食住の三者、美しさが上にも美しく、味よきが上にも味よく、とのへるが上にもとのへんことをのぞむは、人間普通の欲望でございすが、生活の上等下等は、かゝる上皮や容物にてさだめられませぬ。この國の生活は上等にて、日本の生活は下等よとは、碧眼の婦人だちのよく云ふところ、なるほどピアノもたねば嫁入り出来ぬ國、ダイヤモンドかざらねば貴婦人ならぬ國、公園を乗り廻る自動車その價五千四百圓、棚の上の皿一枚巴里製にて百五十弗、島國の女子だちにさかせなば、驚くことでございませう。

されど靜かに考へて御覽なさい。物質的の富は、比較上の富でございす。山里の賤の女が冬着の

洗ひ張りに苦心するも、都の令嬢だちの夜會の帯に想をこらし玉ふも、その身その身の花の色、紫とて上品なるにわらず黄なりとて下品なるにわらず、もつてきた果報相應に咲いて居るばかりではありませんか。羨むものは是ならば、この國人も巴里の榮華を羨まなくてはなりません。誇るものは是ならばわが日の本とて、雞林八道に誇りちらしてもよいのであります。

人類の貴さはその心の奥の深山路にあるのであります、そこに清き感情の水流れてやまず、そこに匂ひある思想の花とこしへに開き、かくて慈愛の宮殿あり同情の樓閣あり、宇宙を莊嚴するのではありますまいか。

歴史といふもの馬蹄の塵にさわぎたる浮世の余韻をとひむるばかりではありますまい誠に誠てふ火に沸

きたてる血、情の出潮のといめがたき涙、これこそ歴史の錦を織りいだす經糸かと思ひます。

この國の建築よしやバベルの塔ほど高くつみわけたりとして、自由のために斃れたる一兵卒はとも後世の寶とはなりませぬ況んやその折々にうつりゆく身をついひ皮、可笑しやいづこに誇るところありませうか。上等の生活を物質的に考へて居るものは精神的の貧民、憐れむべき下等生活の人でございませぬ。四十年前までは、鍵を下せるルームの中、寢巻すがたであつたわが國ですもの、急に舞踏會の仕度せふと云ふてもそれは云ふものゝ無理でござひます。悲しやこの國人は日本の本の物質的に貧しきことのみ知りて、精神的に富めることを知りませぬ。歴史をひもとかんでも、人道と云へる點から考へたなら、いづこの國いかなるところ

にも眞の靈的生活は存在し得るといふことがわかるではありませんか

吾等は自動車に乗り得ざるを悲しみませぬ。ダイヤモンドに身を飾り得ざることを悲しみませぬ。蕞爾たる吾等も宇宙を飾るべき花なることを自覺して身にふさはしき色香めでたからんことを希ふのみでござひます。これは吾等の理想の生活、即ち上等の生活でござひます

この國にて時遅れとなりし流行は遙々太平洋をこえて日の本にうつさるゝやうに、この國人のあるものが抱ける誤解せる生活の標準も我國に傳來せらるゝやうなことはありませんでせうか。あらばそれこそ由々しき大事でござひます。

『いつまでかかゝる頑是なさものばかりを相手にして、手薄き月給にはたらくものぞ、いますこし

高等なる職を得たや。せめては借家住居を廢してせまくともわが家と云ふものかまへたや『保育は神聖なりと人は云へど、お嫁入りの仕度するほどの収入もなくて、いつまで鳥はかあ〜とうたつて居ることか、ア、いやなことだ。イツを何か職をかへやうかしらん』かゝる歎聲もしも日の本の學校教師や幼稚園保姆の口よりもれ出るやうでしたら、それこそアメリカ風邪にとりつかれたのであります。熱のひどくならぬうちに治療をしなくてはなりません。

わが知れる小學教師、片山里に職を奉じて廿年、月給はいつも十五圓、それとて酒を好み玉ふ父君と病める母君とを養ひ居るがごさいます。妻は洗ひ張りや賃しごと、先生は日曜大祭日には八字髻の大公望、二三の會參やら顔回やらは青鼻汁を垂

らしてこれにはんべつて居るといふ境涯、一張羅の袴は垢つきて光うるはしく、煤煙に染みし麥藁帽子阿彌陀にかぶりて詩吟かすかに「浮き」を見つめて居る顔、そもこれ上等の生活か下等の生活か。この村の家長は多くはこの人の教へ子にて今の生徒は二代目の弟子、百五十家の精神的村長となりて葬儀の仕度の指圖もすれば婚禮のむしろに上席をかまへることもある。夫婦喧嘩も先生によりて治まり、親類不和合も先生によりてなだめらる。この人の心百分千分してその親にその子に薰習するに廿年、美しく出來たる無形の樓臺ではありませんか。もとよりこの山里よりは學士もいせず博士もいせず、英雄も豪傑もつくらねど、友愛の種この人によりて植えられ、敦厚の美風この人によりて形つぐられ、幽蘭幽谷にありて人知れず香を

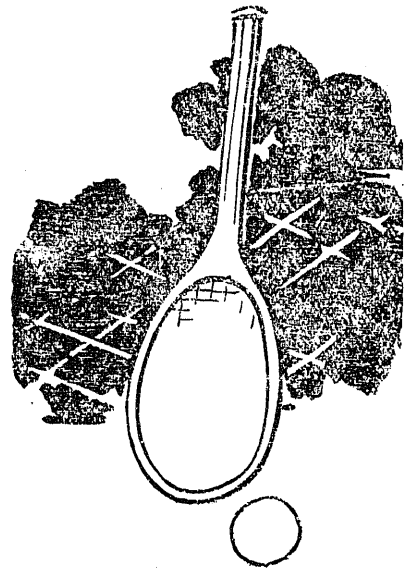
吐くといふ有様ゆかしいではありませんか。

アメリカの教師は一週六十弗日本なら一ヶ月四百八十圓の割になります。日本の本の蝦茶様だちの、家に一つはとねごとまでし玉ふピアノは云ふまでもなく、その時々々の流行に遅れざる室内のかざりつけ、銀色金色燦然として油繪の美人艶色あでやかに石膏の彫像よばば答ふるやうです。されど吾は、泥炭の香鼻をつく津輕新田の一村、教育時論をよみて疎髻を捻じつゝあるわが友の生活、美ましくてたまらぬのであります。世にすねたるの言といふか。色をも香をも知る人ぞ知れ。

さういれ涙よする紋をば青柳の

影の糸して織るかぞ見る

(貫 之)



### 雪中の母とみどり兒 (譯篇)

口之津幼稚園 南 朝 參

雪中の母とみどり兒  
つくばねおろしはだ寒く

暗に荒野の路たえぬ

母は彷徨ふみどり兒を

片手に引きつ片手には

睡れる稚兒を抱きしめ

道なき道をたどりゆく。

吹く風いよゝ寒くして

夜はいよゝ更け行きぬ